

水稻刈り後の秋耕のすすめ

今年の4月は水田の乾きが悪く、稲わらを春すき込みした水田では、5月後半からワキの発生が多く、水稻の生育に影響を与えました。また、令和5、6年の秋は高温が続き、再生稲（ひこばえ）の発生が多くなりました。このような年は、秋耕することで稲わらの腐熟を促進し、堆肥と同様の効果が得られます。令和6年に秋耕した実証結果から、最適な方法を説明します。

1. 秋耕の実証試験結果

秋すき込みの時期を9月下旬、10月中旬、11月中旬および春すき込みの4時期に分けて実施し、イオウチェッカー（硫化水素が多いと黒く変色する）を5月30日～6月9日の10日間水田に埋め込みました。写真1のとおり9月下旬、10月中旬にすき込んだ場合は、変色は少なく、稲わらの腐熟が進みました。一方、11月中旬、春すき込みは黒い変色部分が多くなりました。地温が15℃以下になると稲わらを分解する微生物の活性が低下することから、できるだけ地温の高いうちにすき込むことが大切です。

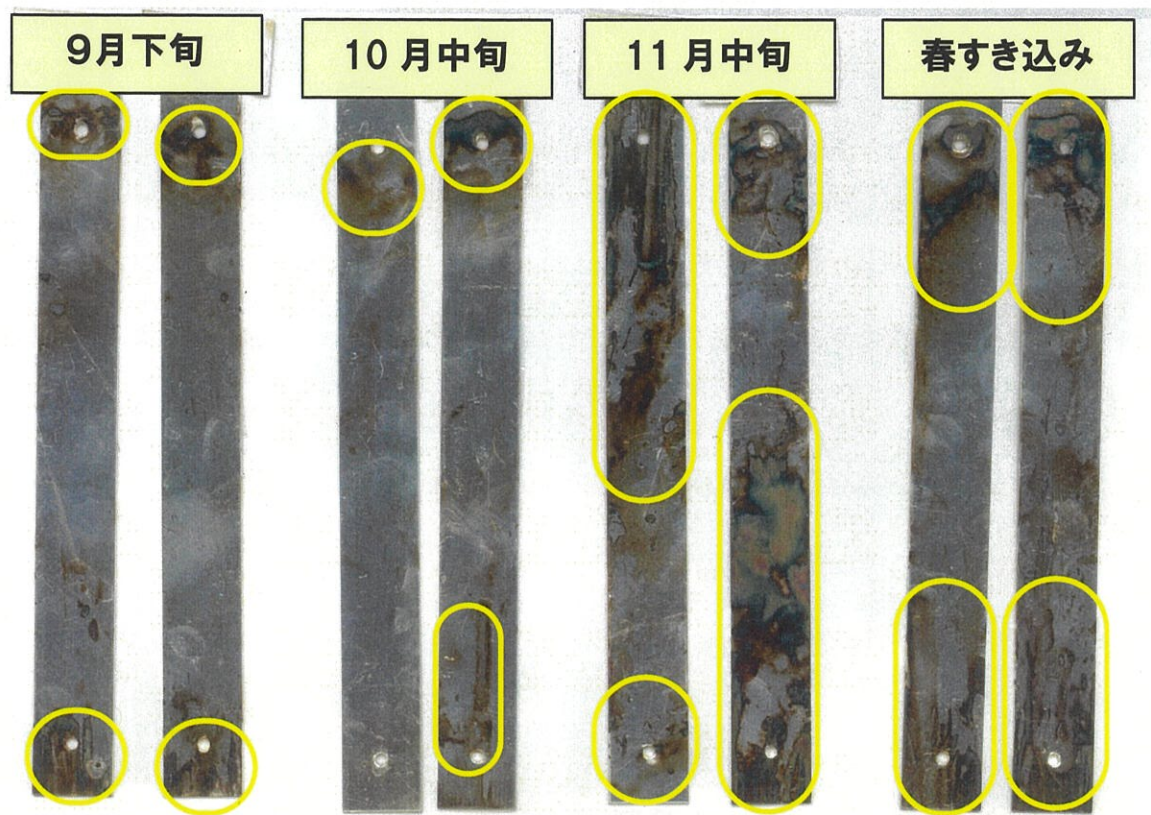


写真1 すき込み時期の違いによるイオウチェッカーの変色状況（○印）

2. 秋耕できない場合は腐熟促進材の活用を

収穫作業が忙しく、秋耕作業ができない場合は、収穫後に稲わらの腐熟促進材を散布することをおすすめします。写真2は、写真1と同一の圃場に「アグリ革命アクア」を9月17日に散布した結果です。すき込み時期が遅くなっても、稲わらの腐熟が促進されていることがわかりました。本材は、ドローンや動力噴霧器など散布器具に合わせて自由に希釈できます。また、細粒タイプ（10aに2kg 散布）もあります。

詳しい使い方は、JAの購買窓口にご相談してください。

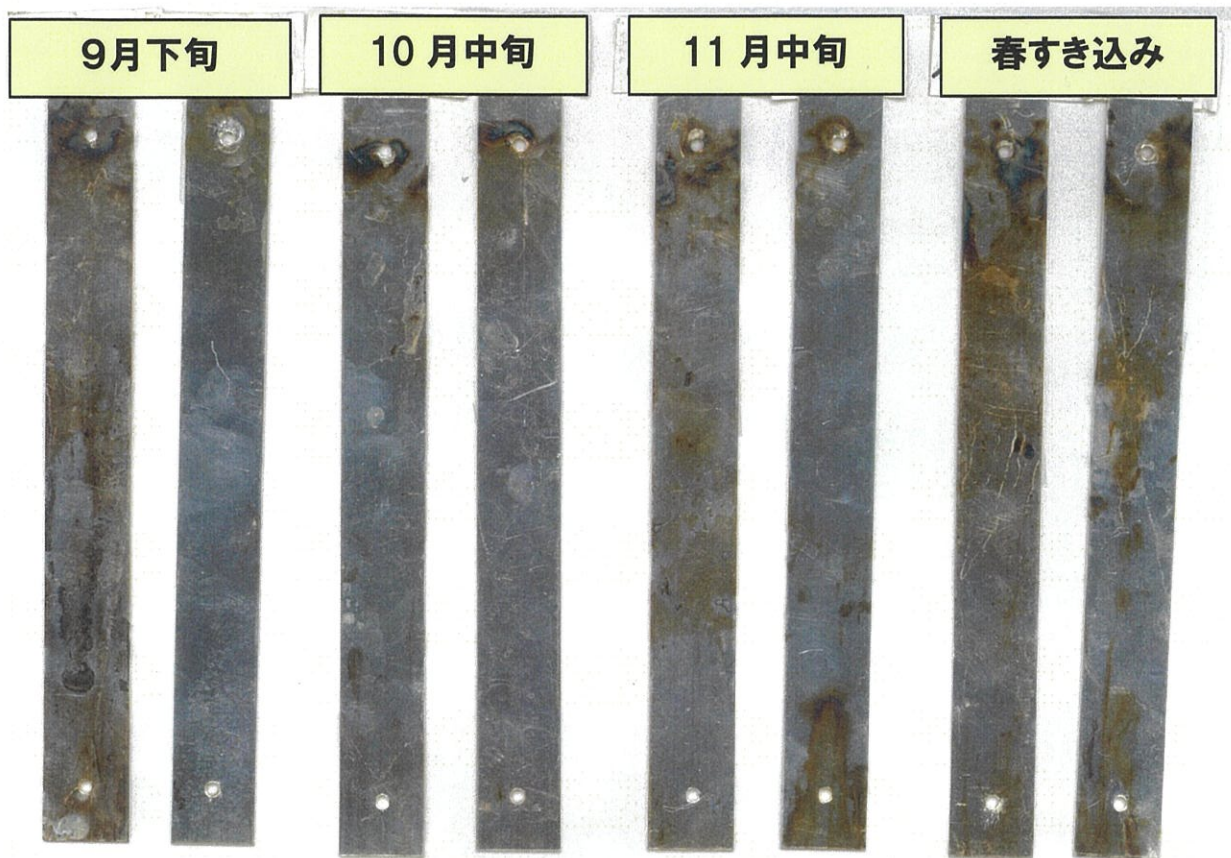


写真2 腐熟促進材を散布したイオウチェッカーの変色状況

（担い手・営農支援部 担い手・営農支援課）